

提出日：令和 3年 2 月 24 日

所 属：獣医学部 獣医学科

氏 名：藤井洋子 職位：教授

## I ティーチング・ポートフォリオ

| 1. 教育の責任（教育活動の範囲）   |          |         |      |        |
|---|----------|---------|------|--------|
| 獣医師として社会貢献できる仕事をするために、科学的な思考を身に付けるとともに他者（臨床の場合は特にクライアント（飼い主）やスタッフ）とのチームワークが構築できるように指導することが自分の目標である。   |          |         |      |        |
| 科目名   | 学科・専攻    | 必, 選, 自 | 配当年次 | 受講者数   |
| 小動物獣医総合臨床 I-IV  | 獣医学科     | 必       | 5    | のべ 744 |
| 総合獣医学   | 獣医学科     | 必       | 6    | 142    |
| 小動物病院実習   | 獣医学科     | 選       | 6    | 2      |
| 先端獣医療   | 獣医学科     | 選       | 6    | 40     |
| 獣医外科学実習   | 獣医学科     | 必       | 5    | 150    |
| 獣医学特論 I   | 獣医学科     | 必       | 5    | 8      |
| 獣医学特論 II  | 獣医学科     | 必       | 6    | 2      |
| 卒業論文  | 獣医学科     | 必       | 6    | 2      |
| 獣医外科学特論   | 研究科獣医学専攻 | 必       | 1    | 3      |
| 獣医外科学特別演習 I   | 研究科獣医学専攻 | 必       | 1    | 3      |
| 獣医外科学特別実験 I   | 研究科獣医学専攻 | 必       | 1    | 3      |
| 獣医外科学特別演習 III   | 研究科獣医学専攻 | 必       | 3    | 1      |
| 獣医外科学特別実験 III   | 研究科獣医学専攻 | 必       | 3    | 1      |
| 2. 教育の理念（育てたい学生像, あり方, 信念）  |          |         |      |        |
| <p>学部学生に対しては、獣医師として仕事をするためには今後どのような姿勢であるべきか、思考回路が必要なのかを授業を通して伝える努力をしている。与えられる受け身の学習から脱却し、これまで学んだ基礎科目等の学問が臨床にどうつながるのかを考えるように促し、学生が能動的に必要な情報を自ら獲得しエビデンスに基づいて客観的に情報を組み立て直していくことができるようになることが私の目標である。</p> <p>大学院生に対しては院生を一研究者として扱い、対等な位置でディスカッションすることを心がけている。院生へのインプットは自分の考えの押し付けはせず、自ら考え組み立てることが可能なようにルールを引くような作業に徹するようにしている。研究を「楽しい」と感じてもらえるような興味の引き出しに成功し、私がルールを引かなくても自分で進んでいけるようになることが大学院教育の私の目標である。</p> |          |         |      |        |

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

アクティブラーニングについての取組

事前に教材を學理にアップし、閲覧後に授業に参加するようにしている。ラウンドにおいて簡単な質問をし、その答えから学生の理解度を測り正確に理解できるように学生個々へのオーダーメイドな授業となるように心がけている。

ICT の教育への活用

ラウンドはオンラインで実施。実習のディスカッションもオンラインで実施した。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

①教育（授業，実習）の創意工夫（B）

②学生の理解度の把握（B）

③学生の自学自習を促すための工夫（B）

④学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（A）

⑤双方向授業への工夫（A）

※A（十分実施している） B（実施しているが十分でない） C（うまく取り組めていない）

上記を鑑みて現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。

他の教員の授業方法を参考にし、オンラインディスカッションでは学生が発言しやすい環境を作るようにしている。双方向授業では、学生が考えられるような時間を今後はもっと取った方が良くかもしれないと考えている。双方向授業後半で Zoom のブレイクアウトルームを使用したところ学生同士がディスカッションしやすそうであったため、来年度はさらにこの機能を活用したい。

⑥国家試験対策としてどのような取組をしましたか。

直近 10 年間の過去問に目を通し、総合獣医学で何に絞って授業すべきか、試験受験時のコツを伝授できるようにし、ポイントについては繰り返し発信した。V5 の授業においても、国家試験では外せないポイントを口頭で伝えることを心がけた。ただし、V5 の授業については国家試験のためだけの、試験対策授業にならないように、自分はいくまで臨床獣医師として誇れる仕事ができるような職業人を産出できることにも注力している。

5. 学生授業評価

① 授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

要望に添える部分は次の授業・実習にすぐに反映させた。

② ①の結果はどうでしたか。

実習時に備品を準備したところ好評であった。

③ ②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。

|  |
|--|
| <p>獣医外科学実習では実習後にアンケートを取り、次回の実習に反映できるようなことがあれば即実行したが、次年度も同様に実施したい。</p>  |
| <p>6. 学生の学修成果</p>  |
| <p>① <u>学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。</u><br/> まる覚えするような授業ではなく、理論から理解し応用できるように授業を組み立てた。卒業論文では、初めから教員がルールを引くのではなく、どの様なルールを引くのかを模索するように考えさせ、その手助けに止める様にした。学生が行き詰まる場合はヒントとなるような情報を与え誘導することも行った。</p> <p>② 教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価<br/> V6 学生 2 名が獣医学会で発表するに至り、外部研究者から多数の質問を頂いた。うち 1 名はさらなる研究のため大学院進学を希望し、来年度から他大学に進学予定である。</p> |
| <p>7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況）<br/> 高校予備校からの情報といったものではなく、大学教育に有用と考えた FD については積極的に参加したつもりである。</p>  |
| <p>8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）<br/> 短期目標：担当する大学院生が、興味領域において銀の弾丸になりうる成果を上げ小動物循環器病学に貢献すること<br/> 長期目標：自身が診療活動に復帰し、EBM だけではなく Narrative-based medicine も学生、研修医等に伝承すること</p>   |
| <p>9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ</p>   |